

平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡
発掘調査報告書

2022年6月

京都市民文化局

巻頭図版



1 1区北側拡張部 落込み26 (南東から)



2 2区 第2面全景 (南西から)

例　　言

- 1 本書は、京都市が下京区四条通西洞院東入郭巨山町31ほかで実施した埋蔵文化財の発掘調査成果の報告である。
- 2 調査及び遺物整理の費用については、マントミ・ビルディング株式会社が負担した。
- 3 現地調査及び遺物整理作業は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が実施し、(株)文化財サービスがその支援業務を受託した。
- 4 遺跡名・受付番号・調査期間・調査面積・調査担当者等は、下記のとおりである。

遺跡名：平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡

(京都市下京区四条通西洞院東入郭巨山町31ほか)

受付番号：21H428

調査期間：2021年11月29日～12月24日

調査面積：42m²

担当者：熊井亮介

- 5 本書の作成及び編集は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で行った。
- 6 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式は、一部を除き、平尾政幸「土師器再考」「洛史」研究紀要第12号（公財）京都市埋蔵文化財研究所2019年に準拠する。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B

- 7 本書で使用した土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
- 8 本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系 平面直角座標系VIによる（ただし、単位(m)を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。
- 9 本書で使用した地図は、本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）などを調整したものである。

本文目次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺構	5
4. 遺物	13
5.まとめ	21

図版目次

巻頭図版	1 1区北側扯張部落込み26（南東から）
	2 2区第2面全景（南西から）

図版1	1 試掘調査区全景（北東から）
	2 1区全景（北東から）

図版2	1 1区全景（南西から）
	2 1区北側扯張部 北壁断面（南から）

図版3	1 1区土坑9（西から）
	2 2区第1面全景（南西から）

図版4	1 2区地山上面検出状況（南西から）
	2 2区埋め戻45出土状況（南から）

挿図目次

図1	調査位置図	1
図2	重機掘削状況（南西から）	2
図3	人力掘削作業状況（南から）	2
図4	調査区埋戻し状況（南東から）	2
図5	機材搬出状況（東から）	2
図6	調査位置及び調査区配置図	3
図7	周辺地形と調査事例	4
図8	試掘調査区 平・断面図及び遺構断面図	5
図9	1区平面図及び東壁断面図	6

図10 1区北側拡張部 第2面平面図及び北壁断面図	7
図11 1区各遺構断面図	8
図12 2区壁断面図	9
図13 2区第1面平面図	10
図14 2区第2面平面図	11
図15 2区各遺構平・断面図	12
図16 遺物実測図①	15
図17 遺物実測図②	16
図18 遺物実測図③	18
図19 遺物実測図④	19
図20 遺物実測図⑤	21
図21 落込み26と北側調査廻池遺構の位置関係	22

表 目 次

表1 遺構概要表	5
表2 遺物概要表	14

平安京左京四条三坊四町跡

烏丸綾小路遺跡

1. 調査経過（図1～5）

調査地は京都市下京区四条通西洞院東入郭巨山町31ほかに所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である「平安京跡」及び「烏丸綾小路遺跡」に該当する。

当該地で事務所の増築工事が計画され、令和3年10月5日付けで文化財保護法93条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。これに対して京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課は、平成19年に北側隣接地で事務所建設に伴い実施された発掘調査において平安時代から江戸時代にかけての遺構・遺物を確認していること、そしてその事前協議の際に本調査地でも工事を実施する場合は事前調査が必要との指導を行っていた事を踏まえ、今回、記録保存のための発掘調査を指導したものである。

現地調査は令和3年11月29日～12月24日まで実施し、実働日数は17日間である。11月29日に準備工・機材搬入等を行い、翌30日より掘削作業を開始した。まず、鉄筋コンクリート構造の解体建物が存在した調査地中央部の遺構の遺存状況を確認するため試掘調査区を設け、その成果を受けて11月30日～12月13日に西側の1区、12月13日～17日に東側の2区で発掘調査を実施した。そして12月20日に機材の搬出作業等を実施し、12月23日～24日に現場の雨水排水のための復旧工事等を行い、現場での一連の作業を終了した。調査面積は、試掘調査区が7m²、1区が23m²、2区が12m²となり、合計で42m²である。

調査の結果、非常に浅い掘削深度で江戸時代～平安時代にかけての遺構・遺物群を確認した。

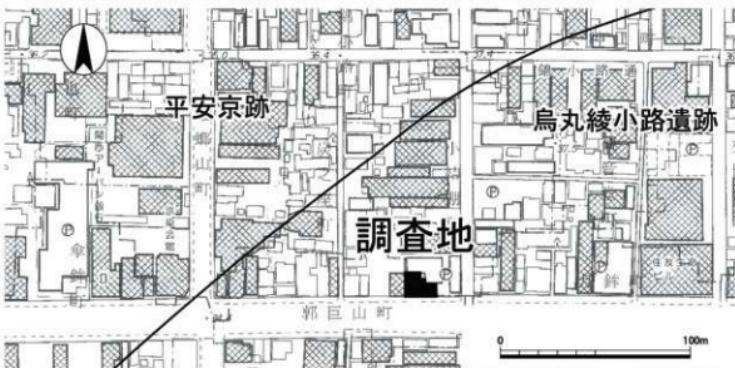




図2 重機掘削状況（南西から）



図3 人力掘削作業状況（南から）



図4 調査区埋戻し状況（南東から）



図5 機材搬出状況（東から）

2. 位置と環境

(1) 立地と歴史的環境 (図6・7)

当該地は平安京左京四条三坊四町跡に該当し、北は錦小路、東は町尻小路、西は西洞院大路、南は四条大路に囲まれる。調査地は本町域の東南隅にあたり、南端部に四条大路北築地心が位置する。

史料等によると本町域については、平安時代中期には藤原公任・頼忠の邸宅が所在したとされる¹⁾。この邸宅は「四条宮」と呼ばれ里内裏としても利用され、数度の焼亡と再建を繰り返したことなどが知られている。平安時代末期には本町域西半に右大臣源雅定の邸宅が所在したとされるが、安元3年(1177)に焼失している。周辺の町域にも同様に貴族の邸宅が分布しており、平安時代を通して比較的活発な土地利用があったものと推測される。

中世には本調査地付近は四条町として知られ、七条町とともに京都における商業活動の中心の一つとなる。文献によると、切革・直垂・鎧・腹巻・引矢・太刀・刀・綾・綿・馬鞍などの様々な座があったことが分かる²⁾。また、室町時代の酒屋の名簿である「酒屋交名」によると、多くの酒屋が四条町周辺に所在していたことが知られている³⁾。

また、周辺の土地利用の在り方を考えるうえで地形も注目される。本調査地付近は京域内でも起伏に富んでおり、これは西洞院川と室町川に起因するものと考えられる。西洞院川は西洞院大路を南北に流れる川である。これに対して、室町川は三条坊門小路から室町小路の中央を南流し、四条大路との交差点で西へ折れ、その後に西洞院川と合流する⁴⁾。室町川の実際の様相や存続時期については不明な点が多いものの、『洛中洛外図』の上杉本や東博模本でその存在が確認できる。

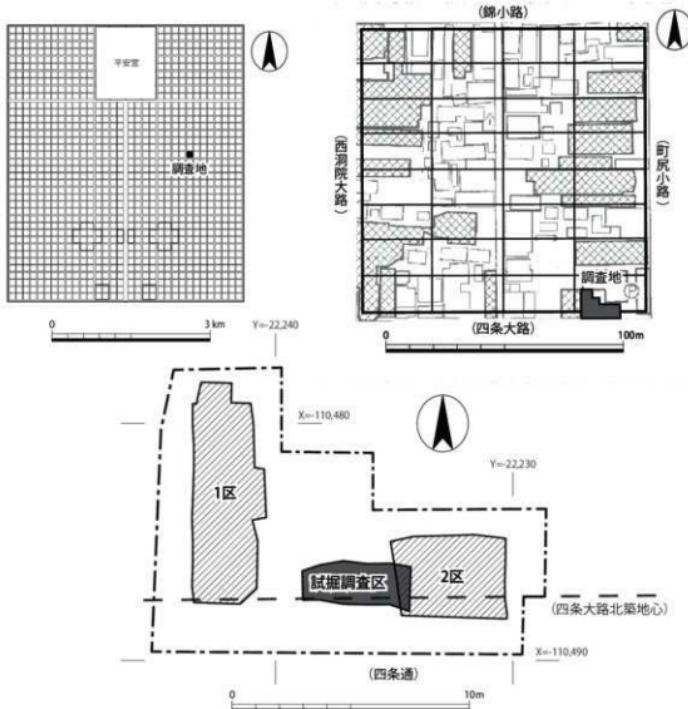
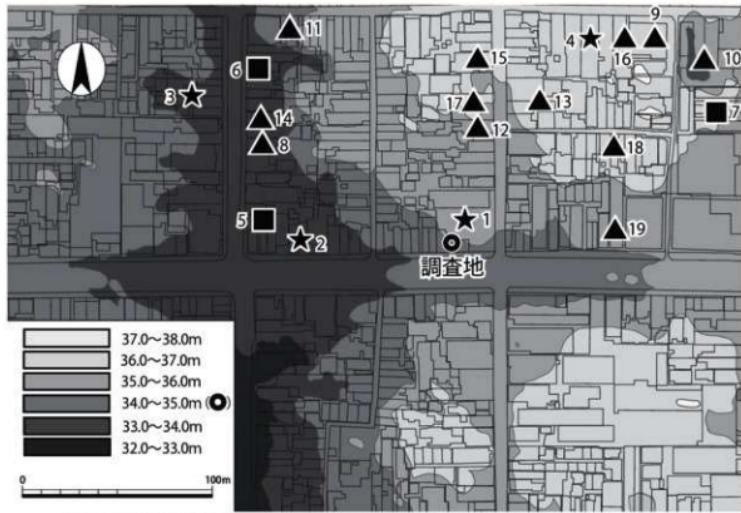


図6 調査位置及び調査区配置図（左上 1：90,000, 左上 1：2,000, 下 1：200）

（2）既往の調査（図7）

調査地付近では、これまで多くの調査が実施されてきた。その主要な調査事例と周辺の大まかな地形を示したのが図7である。西洞院通と四条通に向かって標高が下がっている地形が明瞭に確認でき、本町域内では現状の標高が37～33mと約4mの比高差がある。これは西洞院川と室町川の痕跡と考えられ、各調査地点の遺構面の深度は各川に近づくほど浅くなる傾向が強い。

既往調査では、平安時代～江戸時代にかけての多種多様な遺構・遺物が確認され、各時期の土地利用の一端が明らかになっている。特に中世以降の活発な土地利用の痕跡が顕著である。その中でも、北隣接地（図7-1）での調査成果は特筆される。この調査では、平安時代中期の園池遺構を確認しており、これは前述の「四条宮」と関わる可能性が指摘されている。また、中世以降の鉄造関連遺物は四条町に関連する蓋然性が高い。本調査地は、この園池遺構の汀の延長部に位置し、かつ四条通に面している事から四条町に関する遺構・遺物が展開する可能性が高く、面積は大きくはないが、北側の調査事例とあわせて当町域の歴史的変遷を考えるうえで重要な地点と言える。



※『平安京左京四条三坊四町跡・烏丸線小路遺跡』2007 毎日開設設計コンサルタントの4頁 第4図をトレース・加筆

地点	種別	概要	報告書
1	発掘	平安時代中期～江戸時代の遺構・遺物を確認。平安時代の園池と、中世の鋪造関連の遺構・遺物は特筆される。	『平安京左京四条三坊四町跡・烏丸線小路遺跡』日開設設計コンサルタント 2007
2	発掘	GL-0.3mで地山を確認。平安時代～中世の井戸・土坑等を検出。	『平安京左京四条三坊四町跡・烏丸線小路遺跡』京都府埋蔵文化財研究所 2016
3	発掘	平安時代～江戸時代にかけての遺構・遺物を確認。中世の遺構の遺存状況が良好で、鋪造関連・園池・掘立柱建築・土坑・井戸・溝など多數確認。	『平安京左京西二坊一町跡発掘調査終了報告』古代化粧調査会 2000
4	発掘	平安時代前期～安土桃山時代の遺構・遺物を確認。越州窯系の毛彫青磁様などが出土。	『昭和57年度京都府埋蔵文化財調査概報』京都府埋蔵文化財研究所 1984
5	試掘	GL-0.86mで地山を確認。近世以降の井戸、中世の南北溝、鎌倉時代の土坑、平安時代の井戸・土坑を検出。	『平成12年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局 2001
6	試掘	GL-1.3mで鎌倉時代～室町時代の土坑を検出。	『平成12年度京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市文化観光局 1991
7	試掘	中世の土坑・溝を検出。弥生土器・土師器・瓦器・白磁など出土。	『平成12年度京都市内遺跡試掘調査概報』京都市文化市民局 2000
8	立会	GL-0.9mで鎌倉時代遺物包含層、-1.3mで平安時代遺物包含層、-1.7mで地山を検出。	『昭和59年度京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化観光局 1991
9	立会	GL-1.34mで室町時代遺物包含層、-1.51mで地山を検出。	『平成3年度京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化市民局 1997
10	立会	GL-0.9mで室町時代の土坑、-1.2mで中世の土坑と弥生時代遺物包含層を検出。	『平成12年度京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化市民局 2001
11	立会	GL-0.8mで室町時代遺物包含層、-0.95mで地山を検出。	『平成12年度京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化市民局 2001
12	立会	GL-0.98mで室町時代遺物包含層、-2.03mで平安時代後期の土坑と地山を検出。	『平成6年度京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化市民局 1995
13	立会	GL-1.3mで室町時代遺物包含層、-1.65mで平安時代の土坑と地山を検出。	『平成3年度京都市内遺跡立会調査概報』京都市文化市民局 1995
14	立会	GL-1.3mで中世遺構面、-0.96mで灰色砂礫を検出。	『平成2年度京都市内遺跡試掘・立会調査概報』京都市文化観光局 1991
15	立会	GL-1.6mで平安時代の土坑、-1.9mで地山を検出。	『平成2年度京都市内遺跡試掘・立会調査概報』京都市文化観光局 1991
16	立会	GL-1.58mで中世の土坑、-1.75mで無遺物層を検出。	『平成3年度京都市内遺跡試掘・立会調査概報』京都市文化観光局 1990
17	立会	GL-1.85mで室町時代の土坑を検出。	『昭和60年度京都市内遺跡試掘・立会調査概報』京都市文化観光局 1986
18	立会	GL-2.1mで流れ堆積、-2.7mで弥生時代遺物包含層、-3.0mで地山を検出。	『昭和24年度京都市内遺跡試掘・立会調査概報』京都市文化観光局 1968
19	立会	GL-1.4mで平安時代の土坑、-1.8mで平安時代の整地層を検出。	『昭和57年度京都市内遺跡試掘・立会調査概報』京都市文化観光局 1983

図7 周辺地形と調査事例（1:2,500）

3. 遺構(表1)

(1) 試掘調査区(図8~11)

敷地中央部には鉄筋コンクリート構造の解体建物があったことから、その範囲の遺構の遺存状況を確認するための調査区である。

地表面の高さは標高35.0mでほぼ平坦である。調査区の全体で解体建物による搅乱を確認したが、調査区の東端部のみ近世以前の土層が遺存していた。層序は、GL-0.15mで近世のものと思われる整地層が数層あり、-0.85mで室町時代の遺構面である暗褐色砂質土、-1.05mで地山にぶい黄褐色微砂となる。遺構検出は地山上面で実施した。その結果、土坑と柱穴を1基ずつ確認した。

柱穴1 解体建物の搅乱直下で検出した。平面形は歪な方形で、一辺は0.5m、深さは0.23m。中央部に柱痕があり、直径は0.2m。遺物は出土せず、時期は不明である。四条大路北築地心に近いことから、区画施設に伴う遺構の可能性もあるが、1・2区では同様の遺構は確認できない。

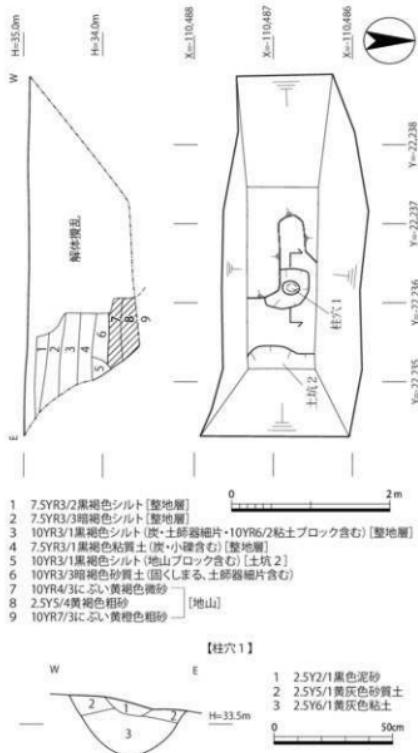


図8 試掘調査区 平・断面図及び遺構断面図(1:60, 1:20)

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代	土坑4・27	(1区) 布掘り地業31 土坑32・33・35・37・39・42・58 石組み65
室町時代	土坑5・7・9・10・12・13・14 17・19・24・25	ビット40・48・63 柱穴47, 石組み55 溝59, 落込み61
鎌倉時代	—	ビット38・41・43・44・46・50・52 埋め棗45
平安時代以前	落込み26, 柱穴28, ビット29 整地30, 土坑69	落込み26は北隣接地で 確認されている圍池遺 構と同一遺構の可能性 が高い。

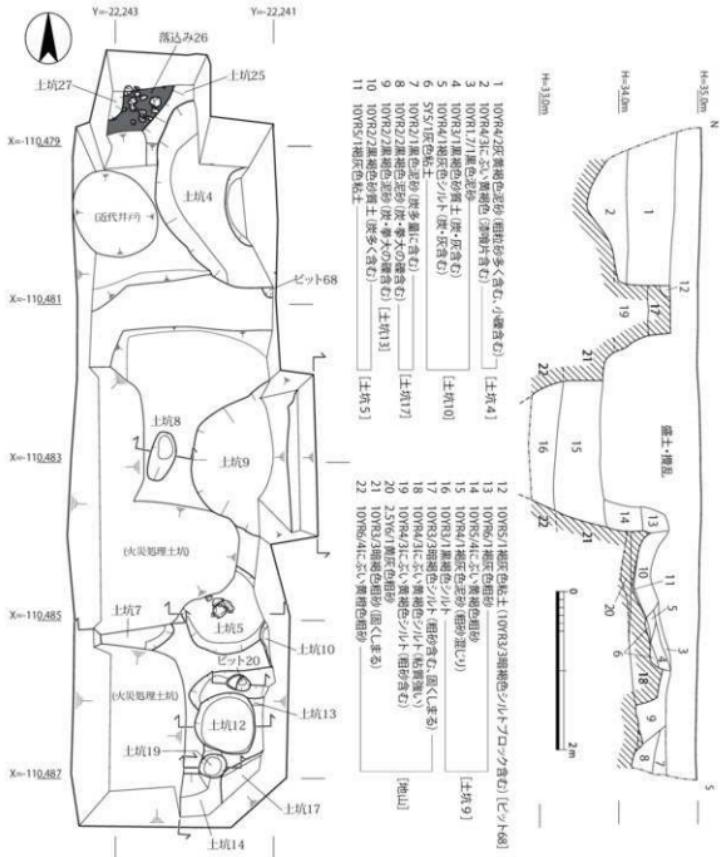


図9 1区平面図及び東壁断面図 (1:60)

土坑2 西肩口のみ確認した。東西0.3m以上、南北0.85m以上となる。位置や埋土の状況から2区の土坑58と同一の可能性が高い。室町時代のものと思われる土師器の小片が出土しているが、土坑58からは江戸時代前期の遺物も確認できることから、江戸時代の遺構と考えておきたい。

(2) 1区の成果 (図9~11)

調査地の西側に設けた調査区である。地面の標高は35.1~35.0mでほぼ平坦である。層序は、盛土や撹乱の直下であるGL-0.35mで地山の暗褐色シルトとなる。近代の井戸や、江戸時代後期の火災処理土坑が複数あり、それらの間に鳥状に遺構面が遺存していた。

遺構としてはピットや土坑、落込みなどを検出した。時期は室町時代のものが多数を占める。ただし、遺物が出土しておらず時期は不明ながら平安時代以前の可能性がある遺構も少数ある。なお、遺構の展開状況を確認するために北側と東側で一部拡張を行っており、比較的遺存状況の良好であった北側拡張部でのみ2つの遺構面で調査を実施している。

土坑5 直径1.1mで、深さは0.24m。底に2cmほどの厚さで粘土を敷き、中心部に拳大の礫を複数配している。室町時代(10A~10B段階)の遺構と考えられる。

土坑7 東肩口のみ確認。西側は調査区外へと続き、北と南側は火災処理土坑によって削平を受ける。規模は東西1.0m以上で深さは8cm。底に薄く粘土を敷く。時期は少ながら室町時代(10段階)の土師器片が出土しており、土坑5と様相が似る。

土坑9 平面は円形を呈し、規模は直径1.9m、深さは2.25m以上である。この遺構については、直上が火災処理土坑でかつ隣地境界の擁壁に近接していたため安全管理上の理由から完掘はしていない。埋土は大きく上・中・下層の3つに大別できる。上層は精良な粗砂で、中層は黒色泥砂、下層は人頭大の礫を多く含む砂泥である。中・下層は水分を多量に含んでおり、掘削底付近は湧水している。石組や木枠等は確認できないが、平面形や深度などから井戸の可能性がある。出土遺物から室町時代(9B~9C段階)の遺構と考えられる。

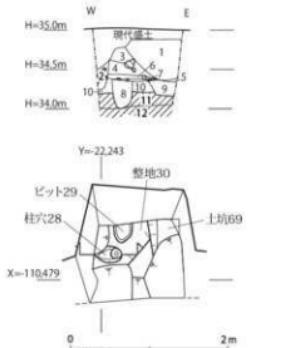
土坑10 西肩口のみ確認した。南北長が0.8m、深さ0.25m。土坑5・7と同様に底に薄く粘土を敷く。出土遺物から室町時代(9B~9C段階)の遺構と考えられる。

土坑12 直径0.7m、深さ0.28m。室町時代(10B~10C段階)の遺構と考えられる。

土坑13 ピット20や土坑12・17等に切られており、全体の規模は不明だが、南北0.8m以上で深さ0.35m。出土遺物から室町時代(9B~9C段階)の遺構と考えられる。

土坑17 西及び北肩口のみ確認した。土坑13・14を切って成立する。室町時代(10B~10C段階)の遺構と考えられる。

土坑24 北側拡張部の北壁で確認した土坑である。土坑23や土坑27に切られる。埋土からは輪羽口と思われる破片や土師器皿の転用埴堀、砥石などが出土している。出土遺物から室町時代(9B~9C段階)の遺構と考えられる。北隣地の発掘調査でも同様に中世の鋳造関連遺物が出土しており、この遺構も四条町に関連するものと考えられる。



- 1 10YRS/3にぶい黄褐色シルト[土坑23]
- 2 10YR3/1黒褐色粗砂(2・3層ブロック含む)[土坑27]
- 3 NA/灰色砂質土(礫多く含む、土師器片含む)
- 4 NA/灰色砂質土(粗砂・小礫含む)
- 5 10YRS/1褐色灰粗砂[土坑25]
- 6 2.5Y4/2層灰黄色粗砂(2.5Y4/1シルトブロック含む)
- 7 2.5Y4/3層リープ褐色粗砂(小礫多く含む、底に固着)
- 8 2.5Y3/1黒褐色シルト(粗砂少量含む)[ピット29]
- 9 10YR3/1黒褐色粗砂シルト(11-10層ブロック含む)[土坑69]
- 10 10YR4/2灰黄褐色シルト(粗砂・灰・土師器細片含む)[整地30]
- 11 10YR8/3浅黄褐色シルト
- 12 2.5YS/2層灰黄色粗砂 [山地]

図10 1区北側拡張部 第2面平面図及び北壁断面図
(1:60)

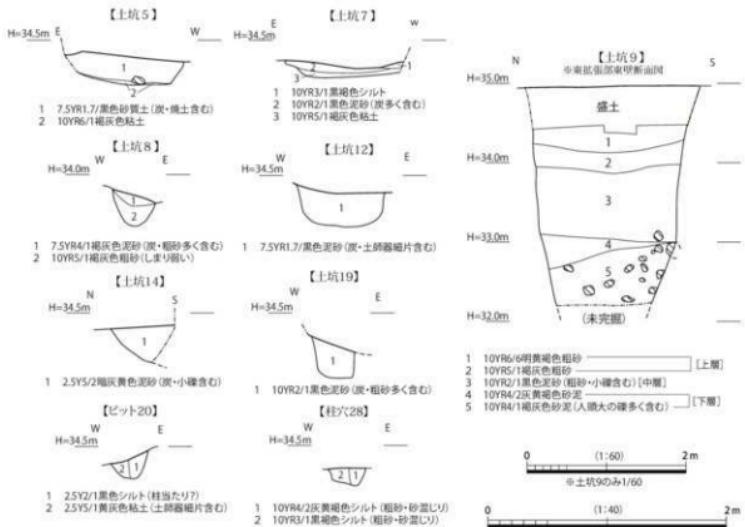


図11 1区各遺構断面図 (1:40, 1:60)

土坑25 西肩口のみ検出した。落込み26を切り込んでおり、室町時代（9段階）の遺物が出土した。

落込み26 北拡張部で確認した。わずかに北側に向かって下がる落込みである。土坑24・25・27によって削平を受けており、残っている箇所でも深さは6cm程しかない。埋土は粗砂で上面には拳大以下の礫が集まっている。その標高は34.45mである。落込み26を切る各遺構の境界部分で室町時代の遺物が出土しているが、落込み26の埋土である粗砂層からは遺物は出土しておらず時期は断定できない。ただし、この落込み26は、北側の発掘調査で確認されている平安時代中期の園池遺構の汀の延長線上に位置する。また、この園池遺構の底の標高は34.4mで平坦であること、そして汀には拳大以下の河原石を敷いていることが判明しており、以上を勘案するならば落込み26は園池遺構の汀である可能性が高い。なお、同様の粗砂層や礫などは、落込み26以南の地山が高い位置に遺存している場所では確認できず、この間が園池遺構の南限と考えられる。

柱穴28 平面は梢円形を呈し、南北0.2mで東西は0.3m。東寄りに柱痕があり、直径は0.15m。遺物は出土していないものの、落込み26の直下で成立することから平安時代以前と推測される。

ピット29 直径0.25mで深さ0.35m。遺物は出土していないものの、落込み26の直下で成立することから平安時代以前と推測される。

土坑69 西肩口のみ確認した。北と東側は調査区外へと続き、南側は土坑4によって削平される。遺物は出土していないが、落込み26の直下で成立することから平安時代以前と推測される。

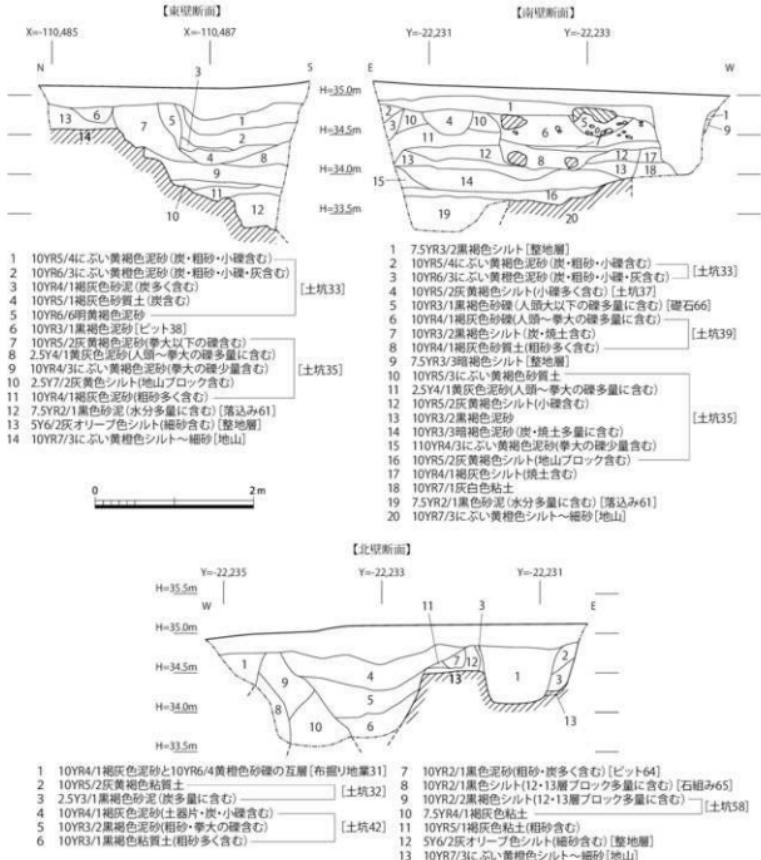


図12 2区壁断面図 (1:60)

(3) 2区の成果 (図12~15)

調査地の東側に設けた調査区である。地表面の標高は35.2~34.9mで、北及び東側の隣接地が一段高くなっている。その敷地境界付近のみ若干高くなっているものの、基本的には平坦である。

層序は、GL-0.1mで調査区の南端部でのみ近世以降の整地層と考えられる黒褐色シルトがあり、この直下の-0.25mで江戸時代前期~平安時代の遺構面に至る。調査区南半部には江戸時代の遺構群が展開しており、その削平を免れた調査区北半部に平安時代後期のいわゆるウゲイス色の整地層が遺存する。そして、-0.55m以下はシルト~細砂の地山となる。遺構検出は黒褐色シルトの直下及び地山上面で実施したが、地山上面では遺構・遺物は確認できなかった。

江戸時代～鎌倉時代の遺構を確認しており、種類としてはピットや土坑、落込み、石組み、礎石、布掘り地業などがあり、調査面積が狭小ながら中世以降の活発な土地利用が伺える。なお、黒褐色シルト直下では各時期の遺構が複雑に重複していることから、便宜上、江戸時代の遺構を第1面、中世の遺構を第2面として報告する。

第1面の遺構（江戸時代）

布掘り地業31 「コ」字形にめぐる幅1m、深さ0.7mほどの溝である。北及び西側は調査区外へと続き、全体の規模は東西は3.7m以上、南北2.5m以上となる。埋土は褐灰色泥砂と黄橙色砂礫が10cmほどの厚みで互層となっている。形態や埋土の状態から、本来は平面が「口」字形を呈する土蔵等に伴う地業と考えられる。遺物は少ないが、江戸時代前期の遺構と考えられる。

土坑32 東西1.3mで深さ0.6m。布掘り地業31に切られており、北側は調査区外へと続く。江戸時代前期（11A～11B段階）の遺構と考えられる。

土坑33 歪な形をした土坑で、東及び南側は調査区外へと続き、北西部は布掘り地業31に切られる。規模は東西1.2m以上、南北1.75m以上。複数の遺構が重複している可能性も検討したが、断面及び出土遺物から一つの遺構であると判断した。江戸時代前期（11B～11C段階）の遺構である。

土坑35 平面では北肩口のみ確認でき、布掘り地業31と土坑33に切られる。東及び南壁断面の検討から南北2.3m以上、東西3.3m以上、深さ1.1mの規模を有する大型の土坑と考えられる。江戸時代前期（11A～11B段階）の遺構と考えられる。

土坑37 南北0.55m以上で東西は0.6m。南側は調査区外へと続き、北側は土坑33に切られる。江戸時代前期（11B～11C段階）の遺構と考えられる。

土坑39 東西2.9m、南北0.9m以上で、北側は布掘り地業31に切られ、南側は調査区外へと続く。埋土は3層に分けられ、下層には粗砂を多く含む砂質土、中層に炭や焼土が混じるシルト層を挟み、上層は人頭～拳大の大きさの礫からなる砂礫層である。特に、上面には大きめの石材が比較的平らな面を上に向けるように配されている。この土坑39の中央部には、礎石66が存在する事から、これに伴う地業の可能性がある。江戸時代前期の遺構と考えられる。

土坑42・58 土坑42は南肩口のみ確認している。東西2.3mで深さ0.9m以上。土坑58は東肩口のみ確認しており、南北2m以上、東西0.8m以上。ともに、ほぼ垂直に掘り込んでおり、埋土にウグイス色の整地層由来と思われるブロック土を多く含む。室町時代の遺物も多く混ざるが、江戸

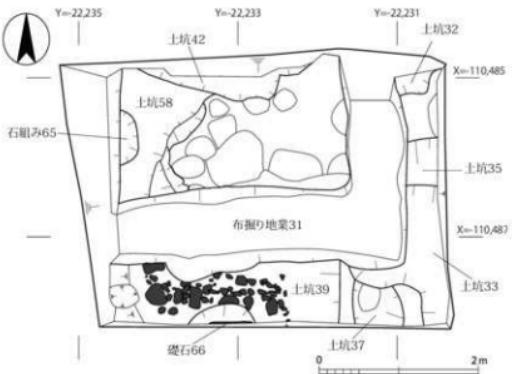


図13 2区第1面平面図（1:60）

時代前期（11A～11B段階）の遺物が確認できる。掘方や土質の様相から、この付近のシルト質の地山を目的とした土取り穴と考えられる。なお、土坑2は土坑58と同一遺構の可能性がある。

石組み65 土坑58を切り込んでおり、直径0.5m以上で深さ0.8m以上。大部分が調査区外に存在するが、狸掘りを行った際に人頭大の石材が3石ほど積まれている様子が確認できることから井戸の可能性が高い。遺物は出土していないが、重複関係から江戸時代前期の遺構と考えられる。

第2面の遺構（室町時代）

ピット40 直径0.45m、深さ0.45mで、東半部は布掘り地業31に切られる。出土遺物から室町時代（9A～9B段階）の遺構と考えられる

ピット48・63 ピット63を切り、ピット48が成立する。ピット48は長軸が0.4mで深さ0.18m。ピット63は長軸0.28m、深さは0.17m。底に長さ0.2m、厚さ8cmほどの石を平坦な面を上に向けて据える。ともに出土遺物は少ないが、室町時代（9段階）の遺構と考えられる。

柱穴47 南半部を石組み55に切られており、規模は東西0.68m、深さ0.36m。底面に8cmほど厚さで灰黄褐色砂泥を敷いた後に、東西0.4mで厚さ0.1mの石材を平坦な面を上に向けて据える。室町時代（9C～10A段階）の遺物が出土している。

石組み55 布掘り地業31や土坑35によって削平を受け、遺構北側の下半部のみ遺存する。方形の掘方を有し、その規模は東西1.6m、南北0.9m以上、深さ0.9mとなる。内側に石積みがあり、東側は人頭大の礫を少なくとも5段以上積む。西側は最下段しか遺存していないが、東側とは異なり南北0.4m、東西0.25mほどの大きめの石材を配している。石積みの内法は0.66mである。湧水層まで達していないことから、井戸ではなく貯水もしくは貯蔵のための遺構と考えたい。遺物は少ないが室町時代（10段階）の遺構と考えられる。

溝59 規模は長さ1.1m、東西0.3m。土坑35によって削平を受け、底部のみ残存している。区画に伴う遺構の可能性がある。小片ながら室町時代（9段階）の遺物が出土している。

落込み61 調査区の南東隅で確認した。大部分が調査区外のため性格・規模などは不明である。埋土は水分を多量に組む黒色砂泥で、北肩口には3本ほど護岸と思われる杭が確認できることから、貯水や水路などの水に関わる遺構と考えられる。出土遺物から室町

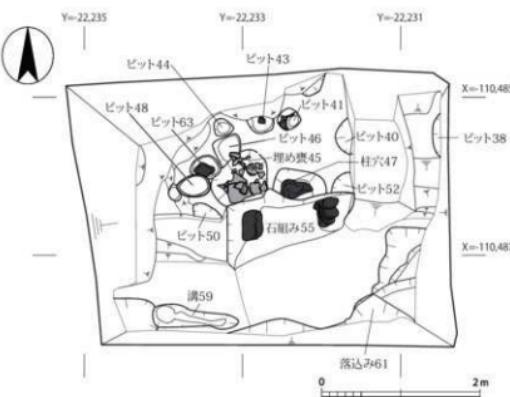


図14 2区第2面平面図（1:60）

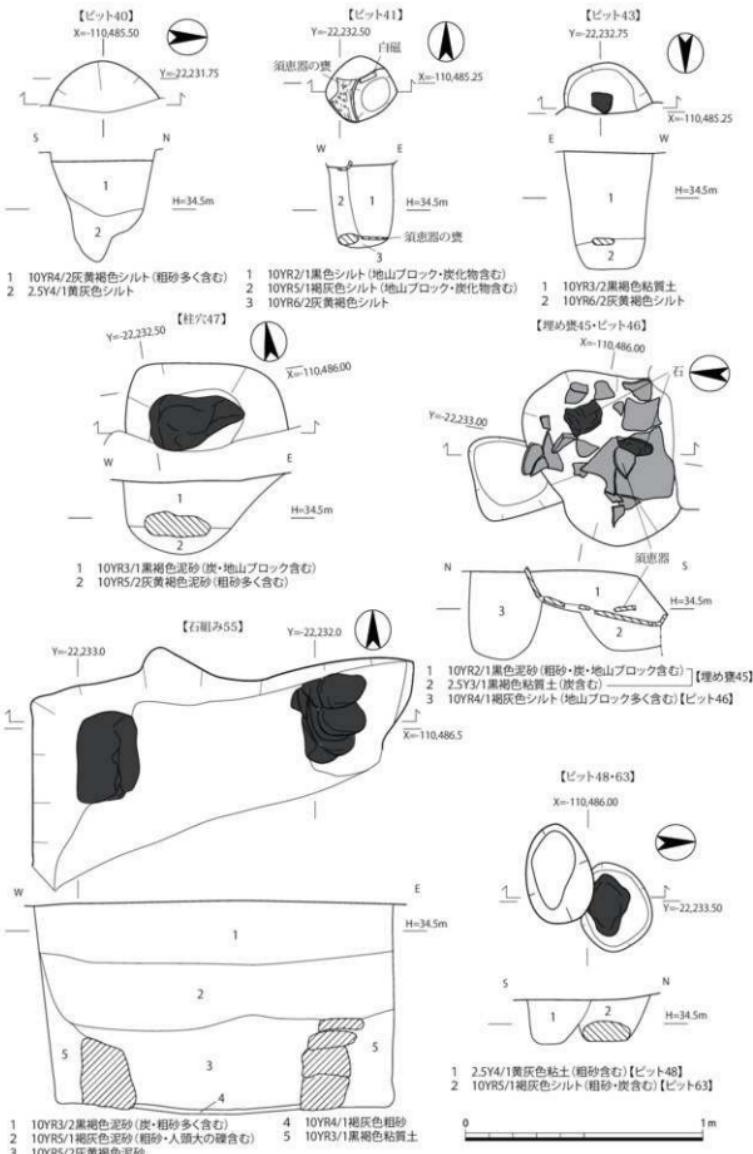


図15 2区各遺構平・断面図 (1:20)

時代（9C～10段階）の遺構と考えられる。位置的に四条通に近接する位置関係にあることから、室町川に面する遺構の可能性もあり注目される。

第2面の遺構（鎌倉時代）

ピット38 直径0.5mで東側は調査区外に続く。鎌倉時代（6B～6C段階）の遺構である。

ピット41 直径0.28mで深さ0.35m。底付近に根固めのために拳大の礫や須恵器の甕の破片を用いている。柱痕が確認でき、直径は0.2m。柱痕に添わせるように白磁や須恵器の甕の破片を配しており、これらは柱の固定材として転用したものと考えられる。転用した須恵器や白磁以外の遺物は乏しい。鎌倉時代（6段階）の遺構と考えられる。

ピット43 北側は土坑42に切られる。直径0.37mで深さは0.5m。底に灰黄褐色シルトを0.1mほどの厚さで敷き、その上に直径0.1mほどの平らな石材を据える。鎌倉時代（6A～6B段階）の遺構と考えられる。

ピット44 直径0.25mで深さ0.25m。小片だが鎌倉時代（6A～6B段階）の遺物が出土した。

埋め甕45 ピット46を切って成立する。南端は石組み55によって削平を受けており、規模は東西が0.75mで、南北は0.6m以上。中央から常滑の甕が出土した。甕は割れているものの、横に倒れた状態で出土しており、口縁部付近と上半部の破片は欠損している。甕の破片に混ざって東播系須恵器や土師器の破片が出土している。鎌倉時代（7A～7B段階）の遺構と考えられる。

ピット50 南半は布掘り地業31に切られており、直径は0.3m以上。鎌倉時代（7B～7C段階）の遺物が出土している。

ピット52 布掘り地業31と石組み55に切られており、直径は0.3m以上。小片だが鎌倉時代（6A～6B段階）の遺物が出土している。

4. 遺 物（表2）

（1）1区の出土遺物（図16～17）

土坑5(1～8) 1・2は土師器皿Nで、口径は1が7.8cm、2が8.8cm。3～6は土師器皿Sで、口径は3が11.8cm、4が13.8cm、5が14.9cm。7は瓦器の火鉢で、小片のため正確な口径の復元は難しいが28cm前後となる。8は青磁碗で、口径は15.7cm。外面に線刻が確認できる。

土坑9上層(42～52) 42～45は土師器皿Nで、口径は42が8.0cm、43が9.4cm、44が10.6cm。46は土師器皿Shで口径は6.2cm。47・48は土師器皿Sで、口径は47が11.4cm。48は小片のため径は復元できないが器厚は6.0mmと厚い。49は灰釉陶器の鉢で、口径は23.8cm。50は施釉陶器の壺で口径は18.0cm。上方に向かって逆「ハ」字形に開く短い口縁を有する。51は白磁の皿で底径は3.4cm。低い削り出し高台を有する。52は石製品の高台部と思われ、小片のため正確な底径の復元は難しいが27cm前後となる。

土坑9中層(53～74) 53～55は土師器皿Nで、口径は53が9.8cm、54が10.6cm、55が10.7cm。53・54は転用埴堀で、二次被熱を受けて色調は灰色を呈し、内面には鉛滓が付着する。56・

表2 遺物概要表

時代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
江戸時代	土師器・瓦器・施釉陶器 焼締陶器・染付・石製品 金属製品など		64点		
室町時代	土師器・土製品・瓦器 施釉陶器・焼締陶器・磁器 石製品など		105点		
鎌倉時代以前	土師器・須恵器・施釉陶器 磁器など		10点		
合 計	—	10箱	181点(4箱)	3箱	3箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランク遺物の抽出、詰め直しのため、出土時より1箱少くなっている。

57は土師器皿Shで、口径は56が6.9cm、57が7.2cm。58~60は土師器皿Sで、口径は58が11.8cm、59が11.9cm、60が14.9cm。61は東播系須恵器の鉢で口径は29.0cm。内面は摩耗する。62・63・64は瓦器で、62は鍋、63は羽釜、64は盤である。65は備前の擂鉢である。底径は11.4cm。擂目は1単位7本で、内面は摩耗する。66は信楽の擂鉢で口径は29.6cm。擂目は1単位4本で、焼成は甘く全体的に白色を呈する。67は灰釉の御目皿で底径は8.8cm。内面には格子状の刻み目があり、底面には糸切痕が残る。68~70は白磁である。68は椀で底径は7.0cm。削り出し高台で、高台付近は露胎する。69は小椀で口径は8.0cm。70は皿で口径は9.0cm。71・72は青磁の椀である。71は外面に線刻の文様が確認できる。72は底径が4.7cm。内面には蓮華と思われる草花が線刻で表現され、外面には鍋と思われる縱方向の模様が認められる。73は青磁の合子の蓋である。外面には陽刻で草花と思われる文様が描かれる。74は砥石である。細かい擦痕が確認でき、部分的に幅1mmほどの使用痕と思われる溝が確認できる。

土坑9 下層(75~85) 75・76は土師器皿Nで、口径は75が9.3cm、76が11.4cm。77~80は土師器皿Sで、口径は77が9.0cm、78が10.0cm、79が14.5cm。80は転用埴堀で、二次被熱を受けて色調は灰色を呈し、内面には鉛滓が付着する。81~84は瓦器である。81は火鉢で口径は41.6cm。82と83は羽釜で、82の口径は22.4cm、83の最大径は26.4cm。84は鍋である。85は瀬戸・美濃の施釉陶器で底径は6.3cm。外面のみ黒釉がかかり、底部には粘土を圧着した小さな脚が付く。香炉と考えられる。

土坑10 (9~11) 9・10は土師器皿Nで口径は9が6.9cm、10が10.3cm。11は土師器皿Sで口径は15.0cm。

土坑12 (12~14) 12・13は土師器皿Sで、口径は12が12.0cm、13が13.0cm。14は信楽の擂鉢で底径は13.2cm。擂目は1単位5本で、内面は摩耗する。

土坑13(15~21) 15は土師器皿Nで口径は8.7cm。16・17は土師器皿Sで、口径は16が10.8cm、17が13.9cm。18は東播系須恵器の鉢、19は瓦器の火鉢である。20は青磁の椀で口径は12.8cm。21は砥石で、表裏と側面に細かな擦痕が確認できる。

土坑17 (22・23) 22は土師器皿Sで小片のため口径は復元できない。23は土師器の羽釜で口径は30.4cm。外面には断面三角形の突帯が一条付く。外面に煤が付着する。

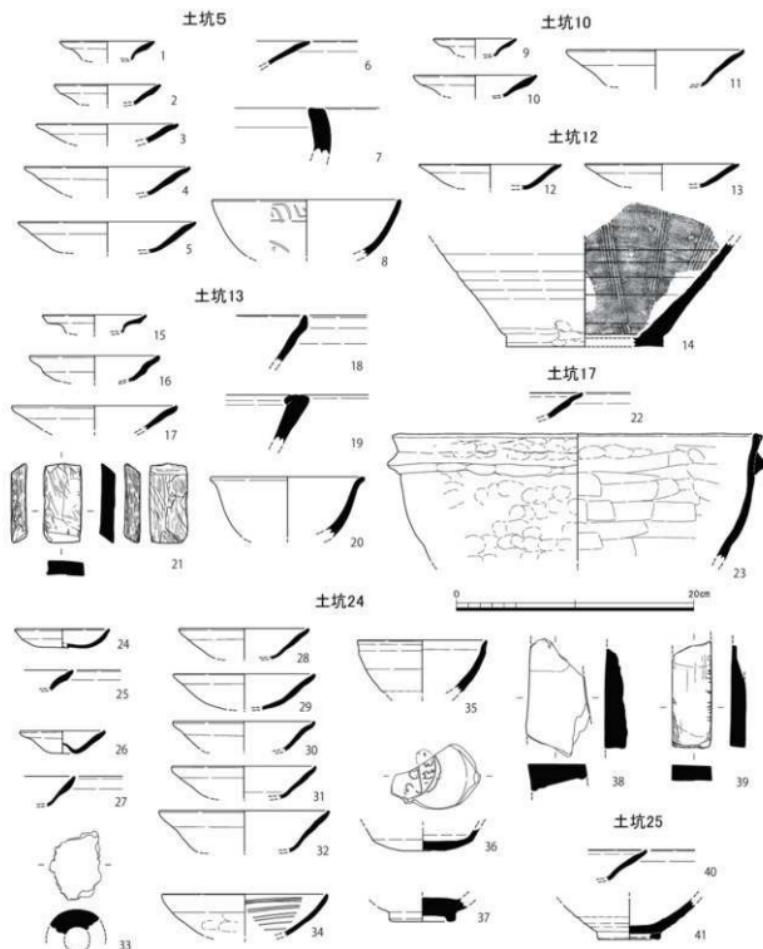
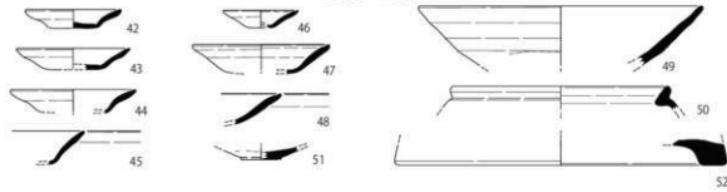


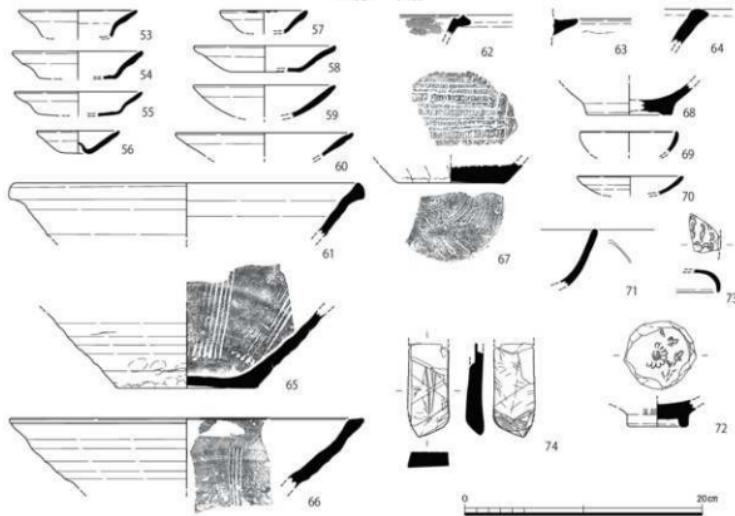
図16 遺物実測図① (1:4)

土坑24(24~39) 24・25は土師器皿Nで口径は24が7.8cm。25は転用壙場で、二次被熱を受けて色調は黒色を呈す。26・27は土師器皿Shで、口径は26が7.0cm。26も転用壙場で、二次被熱を受けて色調は灰色を呈し、内面には鉛滓が付着する。28~32は土師器Sで、口径は28が10.9cm、29~31が12.0cm、32が14.3cm。28・29・30・31は転用壙場で、二次被熱を受けて色調は灰色を呈し、内面には鉛滓が付着する。33は輪の羽口である。色調は灰色を呈する。34は瓦器椀で口径は13.8cm。二次被熱による変色等は顕著ではないが、部分的に鉛滓と思われる付着物が確認

土坑9 上層



土坑9 中層



0 20cm

土坑9 下層

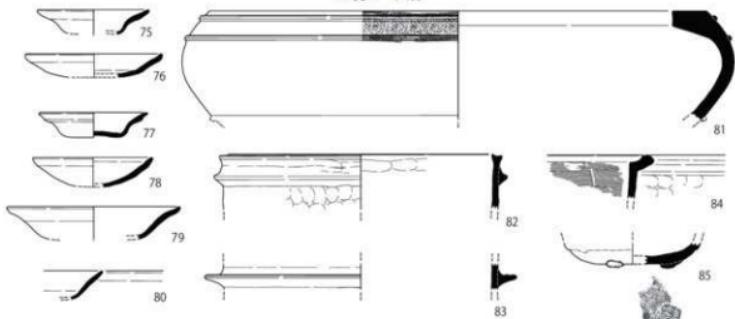


図17 遺物実測図② (1:4)

できる。35は瀬戸・美濃の天目茶椀で、口径は10.9cm。36は青磁の皿で底径は3.4cm。内面には線刻で魚と思われる文様が描かれる。37は青磁の椀で底径は4.8cm。38・39は砥石と思われる。38は剥離している部分もあるが、上面と側面が平滑で非常に滑らかである。ただし、39とは異なり細かい擦痕などがほとんど確認できないことから、他の石製品の可能性もある。

土坑25(40・41) 40は土師器皿S。41は瀬戸の平椀である。貼り付け高台で底径は4.9cm。内面にトチンの痕跡と思われる直径1cmほどの円形の露胎部がある。

(2) 2区の出土遺物(図18~20)

第1面(江戸時代)

布掘り地業31(86~89) 86は柄鏡の鋲型片と考えられる。片面にのみ格子状の線刻が確認できる。表面は被熱を受けており薄い橙色を呈する。胎土に粗砂やスサの痕跡が多く確認でき、側面は若干弧を描く。厚さは5.4cm。87は備前の擂鉢で、擂目は1単位7本である。88は瀬戸・美濃の施釉陶器の壺で、底径は7.4cm。外面には鋲軸がかかり、底面には糸切痕が残る。89は染付の筒碗で底径は7.0cm。高台側面と体部下端に線が一周巡る線が描かれる。

土坑32(90~92) 90は土師器皿Sで口径は11.0cm。91は瓦器の火鉢。92は唐津の椀で、口径は11.8cm。

土坑33(93~129) 93~96は土師器皿Nである。口径は93が5.2cm、94が5.5cm、95が5.7cm、96が7.2cm。97は土師器皿Sbで口径は9.4cm。98~104は土師器皿Sで口径は、98が10.2cm、99・100が10.8cm、101が10.9cm、102・103が11.8cm、104が12.8cm。105~108は土師器である。105は鍋で口径は28.2cm。106は焙烙で口径は28.6cm。口縁部は断面形が丸く肥厚する。107は風炉と推定される。外面はタタキ、内面にはナデで調整する。口縁部から胴部にかけて、「U」字形の例り込みが確認でき、内面には煤が多量に付着している。108は小型壺である。上方に向かってわずかに立ち上がる口縁を有し、頸部に凹線が巡る。口径は9.2cm。109は柄鏡の鋲型片と考えられる。表裏に格子状の線刻が確認できる。表面は被熱を受けており薄い橙色を呈する。胎土に粗砂やスサの痕跡が多く確認できる。110・111は土鈴である。110は高さは3.7cm、最大径は2.6cmで、111は高さは5.3cm、最大径は4.3cm。共に底面に長方形の切り込みがあり、頂部には3mmほどの穿孔がある。111は表面に二次被熱によるとと思われる変色が認められる。112は瓦器の瓦灯で口径は10.2cm。113~115は瓦器の火鉢である。114・115は同一個体と考えられ、平面形は方形で、底面の四隅には「L」字形の脚が付く。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は肥厚し断面が三角形を呈する。116は丹波の擂鉢である。擂目は1単位1本で、内面は摩耗する。117~120は瀬戸・美濃の施釉陶器である。117は椀で口径は9.6cm。黒釉がかかる。118・119は天目茶椀で、118は口径は12.4cm。透明度の低い赤褐色の鋲軸がかかる。119は口径は11.4cmで赤褐色の透明度の高い釉がかかる。120は香炉で口径は7.6cm、底径は4.6cm、器高は5.3cm。口縁には幅7mmほどの平坦面があり、端部を内側に突出させる。121・122は唐津の椀である。121は口径11.1cm、底径は6.5cm、器高は6.5cm。122は口径10.4cm、底径は4.4cm、器高は7.7cm。共に高台

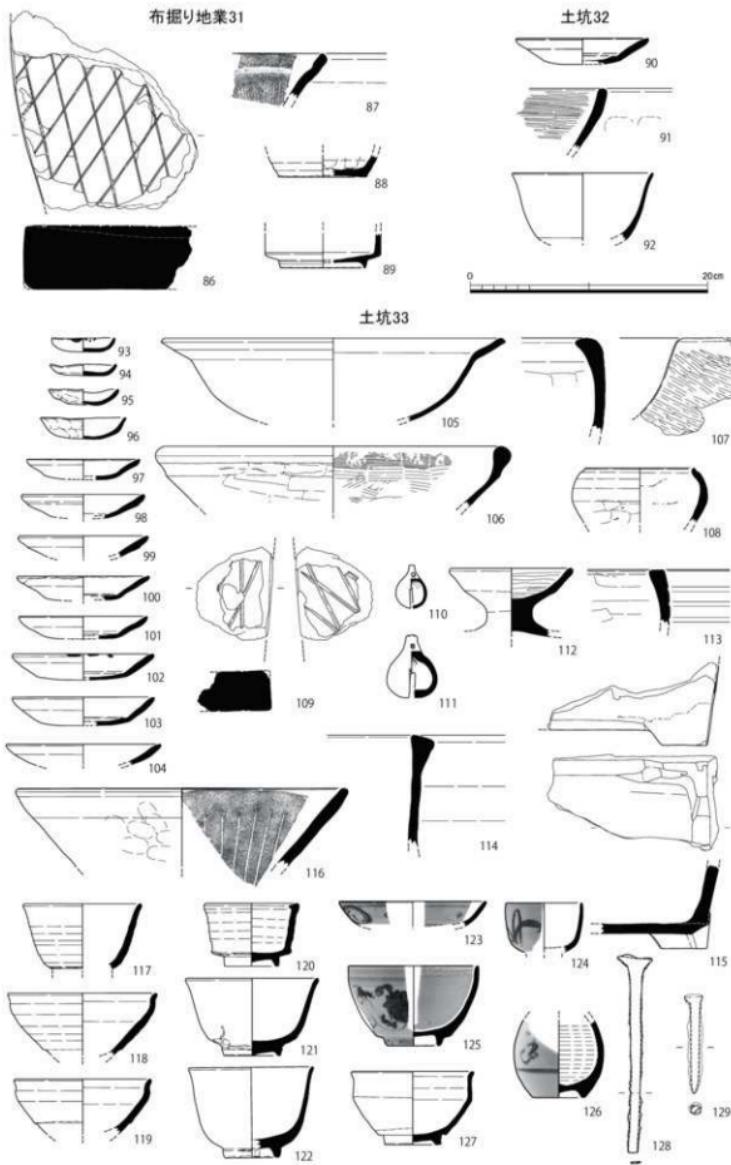


図18 遺物実測図③ (1:4)

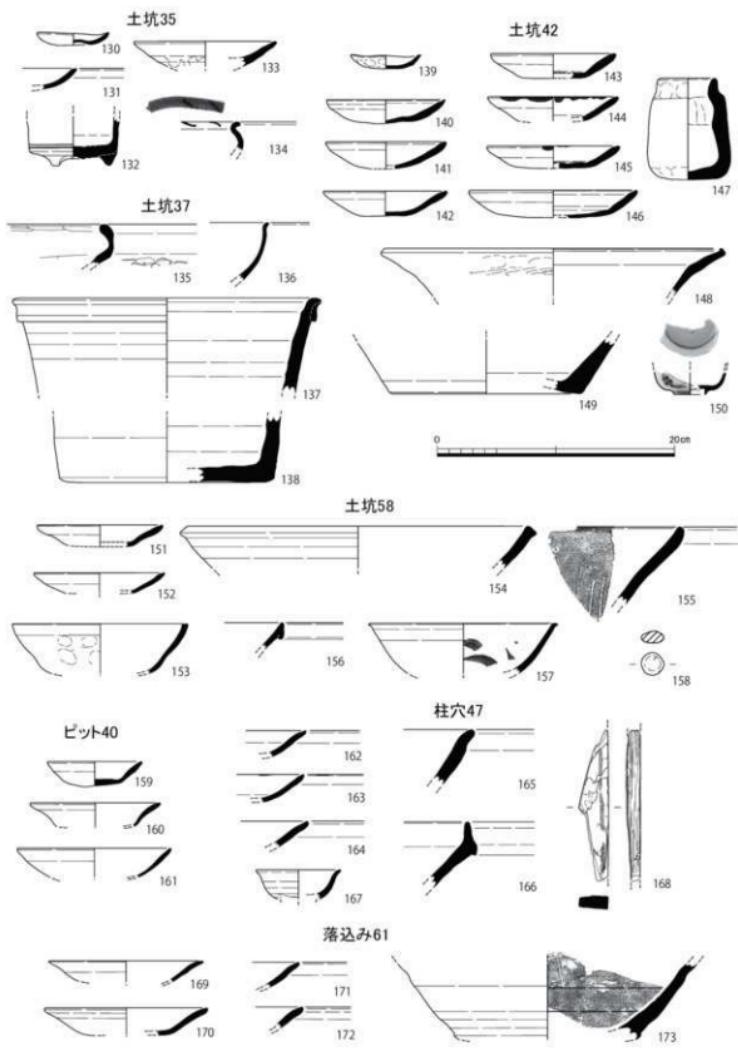


図19 遺物実測図④ (1:4)

は削り出し。123は染付の皿で口径は12.2cm。124・125は染付の椀で、口径は124が6.3cm、125が10.9cm。126は染付の徳利である。底面は碁笥底で径は4.4cm。127は輸入磁器の天目茶椀で、口径は10.2cm、器高は4.7cm、底径は4.6cm。高台は削り出し。128は飾り金具等と考えられ

る。厚さ2mmほどの薄い板上の製品である。全体的に緑青が付着しているが、部分的にその下に鉄と思われる金属が露出しており、鍍金された製品と考えられる。129は鉄釘と考えられる。錫彫れが著しい。長さ8.4cmで断面は一辺0.8cmほどの方形と考えられる。

土坑35（130～134） 130は土師器皿Nで口径は6.1cm。131は土師器皿Sbである。132は黄瀬戸の香炉である。体部の下半には2条の四線が巡る。底部には粘土を圧着した逆台形を呈する小さな脚が付く。おそらく全部で脚は3つ付くものと推察される。内外面の底部には、別個体もしくは窯道具が融着したと思われる円形の剥離痕がある。133・134は唐津である。133は皿で口径は11.9cm。134は向付である。口縁は一度内湾した後に短く外反する。外反した口縁部内面には斜線の文様が描かれる。

土坑37（135～138） 135は土師器の灰器と思われる。口縁部の形状は歪で、体部にはタタキもしくは板押圧の痕跡が確認できる。口縁部は内側に向かって「く」字形に屈曲し、端部は肥厚する。136は瀬戸・美濃の施釉陶器の椀である。長石釉がかかる。137・138は信楽の水指である。137は口径が24.7cmで、部分的に自然釉がかかる。口縁部は外面は突堤を張り付けたような形状で、内面は蓋受けと思われる段差が巡る。138は2区南西部の検出中に出土したが、137と同一個体の可能性が高い。底径は16.8cm。

土坑42(139～150) 139は土師器皿Nで口径は5.8cm。140～142は土師器皿Sbで口径は140が9.8cm、141が10.0cm、142が10.3cm。143～146は土師器皿Sで、口径は143が10.4cm、144が10.8cm、145が11.0cm、146が14.0cm。147は土師器の焼塙壺である。口径は4.6cmで器高は8.6cm。印などは確認できない。148は土師器の鍋で口径は28.4cm。外面には煤が付着する。149は備前の鉢で、底径は16.0cm。内面に描目は確認できない。150は染付の小椀で底径は2.6cm。

土坑58（151～158） 151・152は土師器皿Sで、口径は151が10.4cm、152が10.9cm。153は土師器の鍋で口径は14.6cm。二次被熱を受け色調は灰色を呈す。154は須恵器の鉢で口径は28.8cm。155は丹波の描鉢で、1単位1本の描目が確認できる。156は白磁の椀である。157は青磁の椀で口径は15.6cm。口縁端部は外側に屈曲し、上端に水平な面がつく。内面に櫛目文様が確認できる。158は石製の碁石である。直径1.9cmで厚さ1.0cm。色調は暗緑色を呈する。福井県から石川県下に分布する新第三系医王山層に由来する珪化流紋岩と考えられる。

第2面（室町時代）

ピット40（159～161） 159・160は土師器皿Nで、口径は、159が7.9cm、160が10.9cm。161は土師器皿Sで口径は12.9cm。

柱穴47（162～168） 162～164は土師器皿Sである。165は信楽である。焼成が甘く、灰白色を呈する。166は備前の描鉢である。167は白磁の小椀で口径は7.1cm。168は砥石である。表面には幅1mm程度の細い溝状の使用痕があり、側面には細かな擦痕が認められる。

落込み61（169～173） 169～172は土師器皿Sで、口径は169が12.8cm、170が13.6cm。169は二次被熱を受け色調は灰色を呈する。173は信楽の描鉢である。描目は1単位6本で、内面は摩耗する。焼成が甘く、全体的に灰白色を呈する。

第2面（鎌倉時代）

ピット38（174） 174は土師器皿

Nで口径は9.2cm。

ピット41（175・176） 175は須
恵器の甕で口径は29.3cm。176は白
磁の椀で口径は16.0cm。

埋め甕45（177～180） 177・178
は土師器皿Nで、177の口径は8.8
cm。179は東播系須恵器の鉢で口径
は29.4cm。口縁部付近に重ね焼きし
た際の色調の変化が認められる。
180は常滑の甕である。出土した破
片の大半は下半部のものであり、肩
部より上部の破片は確認できない。
内外面とも自然釉がかかる。底径は
21.4cm、最大径は胴部で70.6cm、残
存高は44.6cm。

ピット50（181） 181は土師器皿
Nで口径は9.6cm。

5.まとめ

ここまで本調査の成果報告を行つ
た。各時期の概要をまとめる以下
のようになる。

平安時代以前 本調査で確認した
落込み26は、北側隣接地で確認した
園池遺構の汀の延長部と考えられ、

時期不明ながら下層で成立するピット・柱穴も確認した。この園池遺構は平安時代中期に属し、新
旧2時期の変遷が認められる。本調査区で確認した汀は、古い段階（1期）のものと考えられる。
なお、この園池は「四条宮」に関わる遺構の可能性が高い。

鎌倉時代 この時期の遺構としては、2区で確認したピット群と埋め甕がある。ピット群から建
物等の復元はできないが、四条大路に面して建物が建っていた様相が想像できる。

室町時代 本調査で確認した遺構の中では室町時代に属するものが最も多い。ピットや柱穴、土
坑、溝のほか、井戸の可能性のある土坑9、貯水又は貯蔵遺構等と考えられる石組み55や落込み
61などがある。当該期の遺構や江戸時代の遺構に混じり、土師器皿を転用した壇堀、鞆の羽口、鉢

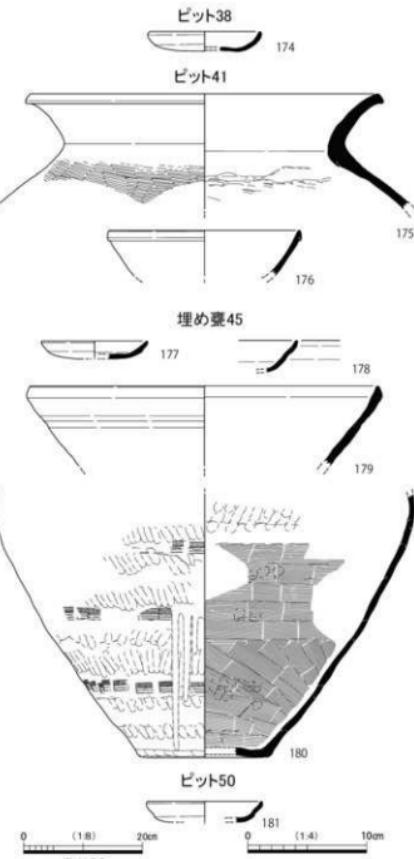


図20 遺物実測図⑤（1:4, 1:8）

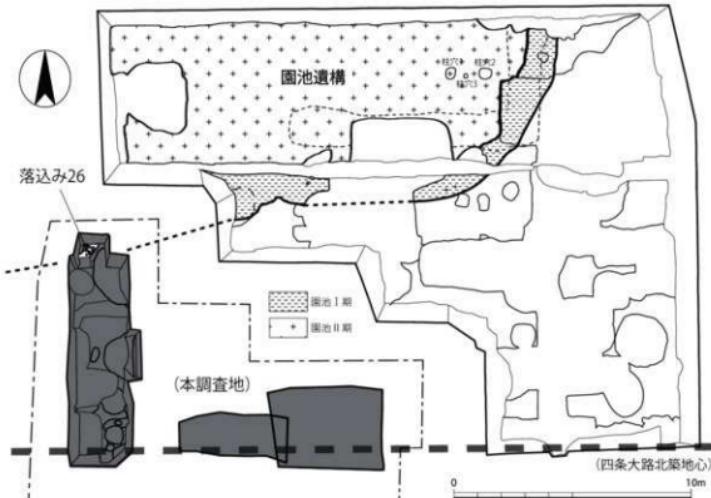


図21 落込み26と北側調査園池遺構の位置関係（1:200）

型、砥石などの鋳造関連遺物が出土しており、これらは「四条町」に関するものと考えられる。

江戸時代 2区では江戸時代前期の遺構を複数確認している。重複関係から整理すると、まず土取り穴と思われる土坑42・58や大型の土坑35が成立する。その後、井戸の可能性のある石組み65、土坑33・37、礎石66とこれに伴う地業の可能性のある土坑39ができ、それらの遺構を切って布掘り地業31が成立する。この様子から、空地であった場所に土取りや大型の廃棄土坑等が掘られ、その後に建物や蔵が造られていくという土地利用の変遷が想定できる。なお、大形の石材を据えた礎石66や布掘り地業31から、これらの建物は町屋ではなく店舗の可能性が考えられる。

以上、本調査では小さい面積ながら、平安時代から江戸時代にかけての遺構・遺物を確認し、各時期における土地利用の一端を明らかにできた。特に「四条宮」に関わる園池遺構の汀と考えられる落込み26や、室町時代の「四条町」に関わると思われる遺構・遺物は、周辺の調査事例と合わせて特筆される。ただし、課題や不明な点も多くあることから、今後の調査・研究による更なる実態の解明が期待される。

(熊井 亮介)

註

- 1) 九条家本『延喜式』左京圖や『拾芥抄』東京圖などでは四町に「四条宮」と記されている。
- 2) 『史料京都の歴史 師街・生業4』京都市1981ほか
- 3) 『北野天満宮史料古文書』北野天満宮史料刊行会編1978、34~46頁
- 4) 大塚活美「洛中洛外圖にみる下京の暮らし」『平安京左京五条二坊十六町跡』1991

図 版

図版1 遺構



1 試掘調査区全景（北東から）



2 1区全景（北東から）

図版2 遺構



1 1区全景（南西から）



2 1区北側拡張部 北壁断面（南から）

図版3 遺構



1 1区土坑9（西から）



2 2区第1面全景（南西から）

図版4 遺構



1 2区地山上面検出状況（南西から）



2 2区埋め甕45出土状況（南から）

ふりがな	へいあんきょうさきょうじょうさんぼうよんちょうあと・からすまあやのこうじいせき はっくつちょうさほうこくしょ						
書名	平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡 発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	熊井亮介						
編集機関	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課						
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488番地 分庁舎地下1階						
発行所	京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課						
発行年月日	西暦2022年6月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号						
平安京左京 四条三坊四町跡・ 烏丸綾小路遺跡	京都市下京区 四条通西洞院東入 郭上山面31ほか	26100 1 712	35度 00分 13秒	135度 45分 23秒	2021年11月 29日～2021 年12月24日	42m ²	事務所
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平安京左京 四条三坊四町跡・ 烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	平安時代以前 中世 江戸時代	落込み・柱穴・ピット ピット・土坑・石組・柱穴 溝・埋め戻 土坑・礎石・布掘り地業 石組み	土師器・須恵器・陶磁器 金属製品・石製品など	※1区の落込み26は北 の調査で確認した園池 遺構の行と考えられる。 ※中世の遺構は四条町に 関連する遺構と考えら れる。		

平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡 発掘調査報告書

発行日 2022年6月30日

発 行 京都市文化市民局

編 集 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

住 所 京都市中京区寺通御池上る上本能寺前町 488

分庁舎地下1階

TEL. (075) 222-3130

印 刷 株式会社 三星商事印刷株式会社

TEL. (075) 256-0961